

教材コーディネーションによる学習意欲の育成

赤井 悟

(奈良教育大学 次世代教員養成センター)

To Equip the Motivation for Learning by Coordinating Teaching Materials

Satoru AKAI

(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)

要旨：本研究では、優れた教師力の具体像に迫るため、M教諭が行なった教材コーディネーションの構造を明らかにするとともに、その基幹である「思い」を考察した。本研究のために実践を提供していただいたM教諭は、平成25年度小学校3年生の担任であり、学級の児童に秀でた学習意欲を育成した。M教諭が学級経営として行った3つの教材コーディネーション（計算練習コーディネーション、漢字記憶コーディネーション、意味調べコーディネーション）を検討した結果、そこには、従来の教材使用時に意識されていた「選択」「仕組」に加え、教員の児童や教材に対する「思い」が存在し、これらは3層構造を成すと考えられた。さらにその中の基幹である「思い」を分析した結果、M教諭の「思い」には、「児童を正視する要素」「教育の専門知識とスキルの要素」「教員の自己管理の要素」があり、これらが児童の学習意欲育成に大きな役割を果たしたことが推察された。

キーワード：教材 teaching materials

学習意欲 motivation for learning

学級経営 classroom management

教師力 ability as a teacher

教師教育 teacher education

1. 研究の目的

児童生徒の指導に、優れた教師力を発揮する教員がいる。そのような一人、M教諭は、N市の公立小学校に勤務する女性教員である。本研究で取り上げた実践時（平成25年度）には、3年生の学級担任であった。M教諭は、広く使われているいくつかの教材をコーディネーション（以下、教材コーディネーション¹とよぶ）し、この学級の児童に秀でた学習意欲を育成した。学年末、ある児童は「三年生になってわたしは、漢字テストや意味調べ、計ドふく習も自分自しんから『やろう』とか『やりたい』と思えるような勉強のやり方を知って、（中略）これから四年生になってもがんばっていきたいです。」と述べ、ある保護者は「3年生で、先生に、勉強の取り組み方、がんばること、出来た時の喜びや楽しみ方を教えていただいたので、（中略）感謝でいっぱいです。」と述べている。

児童の学習意欲について、桜井（1997）は「無気力から外発的な学習意欲²、外発的な学習意欲から内発的な学習意欲²へと順番に学習意欲は伸びていく」とし、さらに内発的な学習意欲の重要な要素として自己

決定をあげている。2008年に改訂された小学校学習指導要領総則においても、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と、内発的な学習意欲が「主体的に学習に取り組む態度」と表現され、その育成が強く求められている。

一方教材について、藤岡（1989）は、教材を「一定の目標を実現するようなはたらきをもった学習材料のこと」、「誰が用いても授業で一定の成果を保障できるように組織された」ものと定義している。しかし、佐久間（1990）は「他者のすぐれた授業を見たり、その記録に接したりすると、同一の教材で自分の学級でも授業しようとする教師は多い。しかし、他者の授業で子どもたちがめざましい追及を示した教材が、そのまま自分の学級の子どもたちにも深い追及を保証するとはいえない。」と述べ、教材と学習の質の間に教師力が介在することを示唆している。

優れた教師力について赤井他（2013）は、平成23

年度奈良県優秀教職員へのヒアリングから、教師力があるといわれる教員の児童生徒に対する姿勢の傾向について論じ、「優秀教職員に顕著なことは、教職経験を重ねたある時期、(中略)自分主体の教育観から児童生徒主体の教育観への転換が見られるのである。」と述べている。さらに秋田(2012)は、教員は熟達化により「教える技能を効率よくあてはめることよりも、子どもの息遣いを感じ息を合わせられる」ようになると述べている。

それでは、児童に秀でた学習意欲を育成したM教諭の教師力とは如何なるものか、他の教員とどこが異なるのか。本研究では、優れた教師力の具体像を明らかにするため、M教諭が行なった教材コーディネーションに着目し、その3層構造を示す。さらにその中から、教材コーディネーションの基幹と考えられる「思い」を考察する。

なお、本研究で取り上げたM教諭の実践は、研究や発表を意図したものではなく、日常の学級経営であることを付記する。

2. 方法

2.1. 聞き取り

平成26年4月から8月、平成25年度M教諭が行った3年生の学級(児童数36人)の学級経営について、聞き取り調査を行った。聞き取りは、M教諭からの説明と質疑応答で、5回計約10時間であった。

2.2. 関係資料の提供

聞き取りと同時に、M教諭から関係資料の提供を受けた。資料は、教材、児童の学習結果、児童の写真、学年末に児童が記した文章、次年度の提出書類に保護者が自由に記した文章であった。

3. 結果

3.1. 教材コーディネーション

聞き取り調査の結果、M教諭は学級経営として、少なくとも6つの教材を用いた指導を並行して行っていた。これらを、「計算練習コーディネーション」「漢字記憶コーディネーション」「意味調べコーディネーション」「ハッピーレターコーディネーション」「オペレッタコーディネーション」「百人一首記憶コーディネーション」とよぶ。この中から、聞き取りデータと関連資料からその過程が追跡できる「計算練習コーディネーション」「漢字記憶コーディネーション」「意味調べコーディネーション」を取り上げる。以下、選択された教材(以下、「選択」³という)、M教諭が児童に示した教材の使い方(以下、「仕組」³という)、これらの根底にある児童や教材に対するM教諭の考え(以

下、「思い」⁴という)、M教諭が記録した児童の学習結果⁵、学習結果のグラフを示す。

3.2. 計算練習コーディネーション

3.2.1. 選択

M教諭は、計算練習コーディネーションの教材として図1に示す計算ドリル(新計算ドリル3年 新学社2013)を選択した。この種の教材は、M教諭の勤務校の多くの学年で使用されているものであった。

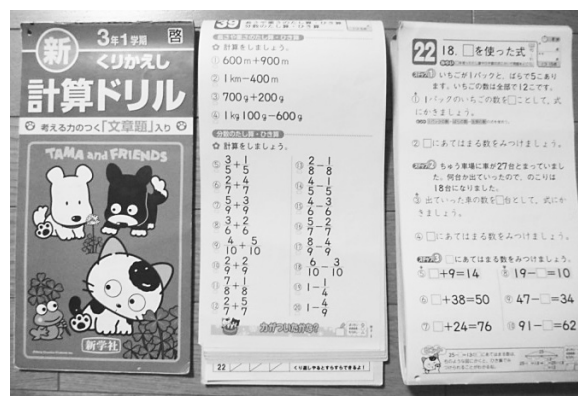


図1 計算ドリル

3.2.2. 仕組

M教諭は、この教材を使うにあたり、児童に次のように使い方を示した。

- ① ドリルの計算と解答は、ドリルノートに丁寧に書きましょう。
- ② ドリルは習ったところまでしましょう。
- ③ ドリル1ページは、3回解きましょう。
- ④ 同じページを解くのは1日に1回までです。
- ⑤ 競争ではありません。
- ⑥ 2週間に一度、学級活動のとき、解いたページ数を先生に教えてください。

3.2.3. 思い

M教諭は、児童とこの教材について、次のような「思い」を述べた。

計算ドリルノートには、筆算の計算では1マスに1つの数字、その他では1マスに2つの数字を丁寧に書くよう指導しています。算数で丁寧に書くということは、字を丁寧に書くということと見やすく書くということの両方を指しています。丁寧に書かせることで、子ども自身もノートが見やすくなり、ケアレスミスを防ぐことができます。

計算ドリルは復習と位置づけています。塾などで先のページができる子もいますが、クラスでは「習ったところまで」という一線を引いています。計算は、何度も練習することでその速さが速くなり、ミスが減り

ます。計算に余裕ができた分、次の考えるということにも余裕ができます。また、小学校3年生の段階では、予習はいりません。私は、子どもたちが学校で初めて単元の内容に出会い、それを考えるという授業をしたいと考えています。ここで子どもたちには、解き方を考える楽しさを体験させます。

「同じページは1日に1回」としているのは、同じページを続けて練習しても意味がないからです。答えを覚えてしまって、それを書いているという状態になるので。

「競争ではありません。」と言っているのは、クラスの子どもたち全員がいわゆる良くできる子ではないし、興味あるところも、使える時間も、家庭の環境もみなそれぞれ違うからです。上位の子どもは競争で伸びますが、一番でないから計算ドリルはもうしないという子どもを出してはいけません。子どもたちそれぞれのペースでがんばればよいのです。

計算ドリルノートは、係の子どもが毎朝チェックしていますが、2週間に一度、自己申告で計算ドリルを何ページしたのかを聞きます。ここには2つの意味があり、その一つは子どもたちのがんばりを確認し、褒めてやるためです。定期的に練習ページ数を聞くことで、その子の意欲が継続しているか、またはどこかで挫折しているかがわかります。先生は、子どもを褒め励ますプロでないといけません。もう一つは、私の仕事の都合からです。一人ひとりの計算ドリルノートのチェックはたいへん時間がかかります。2週間に一度自己申告を聞くことにすれば、それほど負担なく私の学校の仕事に位置づけることができます。子どもたちが嘘の申告をすると、経験上なぜか私の目に留まりません。

計算ドリルでは、必ず学級にきちっとする子がおり、私が「同じページを3回するとすらすらできるようになるよね。」と問いかけると、うなずいてくれます。それを周りの子どもたちは見ているのです。この子たちが学級を引っ張ってくれるのです。

3.2.4. 学習結果

M教諭が記録した児童の学習結果（練習ページ数）の一部を、図2に示す。

3年1組名列表

番号	氏名	9/8	9/24	10/7	10/21	11/5	11/18	12/2	12/16	12/19
1		15	31	45	63	96	108	128	133	
2		26	77	153	161	176	191	207	229	241
3		23	33	43	55	71	84	99	127	132
4		10	11	20	27	37	44	57	73	76
5			25	46	65	98	122	130	203	215

図2 学習結果（練習ページ数）の記録（2学期）

3.2.5 学習結果のグラフ化

学習結果（練習ページ数）から、学級平均の推移をグラフ化し、図3に示す。ただし、点検時に欠席等で、学習結果が空欄になっている児童については、前回点検時の練習ページ数を暫定的に計上した。

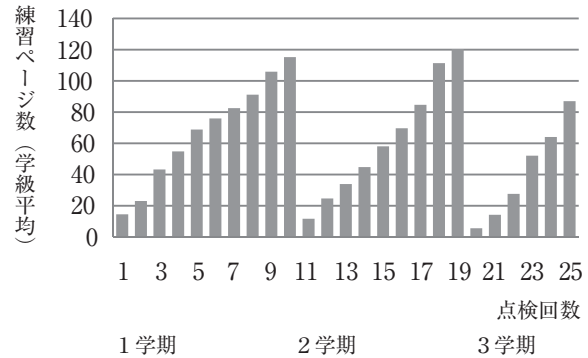


図3 練習ページ数の学級平均の推移

計算ドリルは、各学期分冊のため学習結果も3つに分かれているが、児童は年間、学級平均で300ページほどの練習を行っていた。またグラフの伸び具合からは、児童の学習意欲に減衰がないことが示されている。

3.3. 漢字記憶コーディネーション

3.3.1. 選択

M教諭は、漢字記憶コーディネーションの教材として図4に示す漢字ドリル（新漢字ドリル3年 新学社 2013）を選択した。この種の教材も、M教諭の勤務校の多くの学年で使用されているものであった。



図4 漢字ドリル

3.3.2. 仕組

M教諭は、この教材を使うにあたり、児童に次のように使い方を示した。

- ① 漢字の「とめる」「はねる」「はらう」は正確に書きましょう。

- ② 単元が終わるとき、10問の漢字テストをします。
- ③ テスト前には、漢字を見ながら1回、ひらがなを見ながらテストのつもりで1回練習します。漢字のページを見て、自分で丸つけをします。間違ったところは練習し直します。
- ④ 10点でなかった人は、間違った漢字を漢字ノートに練習、再テストをします。
- ⑤ 学級全員が10点を取ればいいですね。

3.3.3. 思い

M教諭は、児童とこの教材について、次のような「思い」を述べた。

漢字指導は、あらゆる指導の基本です。「とめる」「はねる」「はらう」を正確に書くことや書き順、書き方(部首や覚え方)を丁寧に指導します。また、新出漢字では、短文を作らせています。

テストという具体的な目標があるから、子どもたちは勉強します。テストでは、満点が取れるように家で漢字ノートに練習させますが、これが漢字の宿題です。ここでは、丁寧に書くことを指導しています。これは、テレビを見ながらなどはいけないということで、丁寧に書いていないノートはやり直しさせます。覚えられない漢字は、ノートが全部埋まるまで何回も練習するよう言っています。ノートに書いただけでは練習したことになりません。満点が取れるようになって初めて練習したと言えます。漢字ドリルは計算ドリルのように何度もさせていません。一度覚えた漢字は何度も書く必要はないからです。できなかったことをできるようにする、分からなかったことを分かるようにする、私はそれが学習だと考えています。指導のないところに教育はありません。

テストを返すときには、子どもたちががんばりを振り返れるよう、短くコメントします。もう少しで全員満点のときは、「あと3人で全員満点でした。」などと言っています。間違った漢字があった子どもには、再度の練習と再テストを行い、確実に記憶させるようにします。学習が遅れがちな子どもでも、漢字は練習すれば必ず覚えられます。漢字ドリルと漢字テストは、がんばればできるということを子どもたちに体験させるための教材です。

子どもたちには、「みんなでがんばろうね。」と言っています。勉強は厳しく辛いものですが、一方では楽しく、それに目標がなければ続きません。10問漢字テストとは別に、学期に2回ほど50問のまとめの漢字テストを行います。このテストで満点だったということは、子どもたちにとってはこの上ない自信になります。今まで学習が遅れがちだった子が50問テストで満点を取ったとき、全員の前で発表したことがありました。みんなは「おっ〜。」と言って拍手しました。

私は、さらにその子のがんばりを追認しました。やはり、100点は特別です。このようなことがきっかけで、子どもたちは他の学習にも自信をもち、表情も変わってきます。学級という集団には、子どもを伸ばす働きがあります。

3.3.4. 学習結果

M教諭が記録した児童の学習結果(10問漢字テストの得点)の一部を、図5に示す。なお、記録中「-」は10点を示す。

「めがて、あせらず、あきらめず」 3年1組名列表

番号	氏名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		9/5	9/6	9/3	9/7	9/26	9/27	10/2	10/3	10/9	10/10
2		-	9	9	-	-	-	9	-	9	9
3		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4		-	-	7	9	-	9	9	9	-	-
5		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

図5 学習結果(10問漢字テストの得点)の記録(2学期)

3.3.5 学習結果のグラフ化

学習結果(10問漢字テスト得点)から、満点者数の推移をグラフ化し、図6に示す。

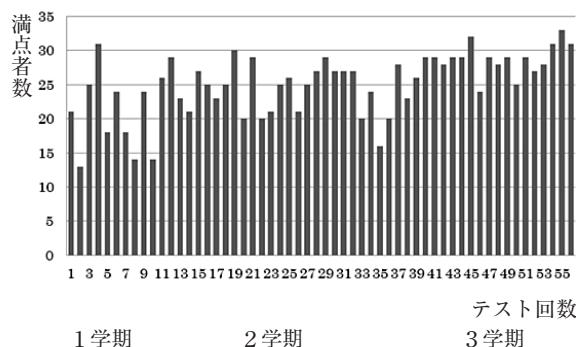


図6 満点者数の推移

年間56回の10問漢字テストが行われた。満点者数は、出題される漢字の難易、未受験児童の人数によりかなりの増減がみられるが、1年を経て徐々に増加していることが示されている。

3.4. 意味調べコーディネーション

3.4.1. 選択

M教諭は、意味調べコーディネーションの教材として図7に示すような国語辞書(出版社は任意)を使用した。小学校3年生国語で、辞書の使用が初出する。M教諭は、この機会を逃さず、学級経営に取り入れたのである。ただし、このような辞書の使用は、多くの小学校教員が行っており、特別珍しいものではない。



図7 国語辞書と意味調べノート

3.4.2. 仕組

M教諭は、この教材を使うにあたり、児童に次のように使い方を示した。

- ① 調べた言葉と意味は、意味調べノートに書きましよう。
- ② 調べた言葉のページに付箋を貼りましよう。
- ③ 国語の授業だけでなく、生活の中でわからない言葉が出てきたら調べてもいいですよ。
- ④ 競争ではありません。
- ⑤ 2週間に一度、学級活動のとき、幾つ言葉を調べたのかを先生に教えてください。

3.4.3. 思い

M教諭は、児童とこの教材について、次のような「思い」に述べた。

辞書を引くというのは、子どもたちの知る言葉を増やす活動です。調べるのは楽しいですが、それだけではだめで、意味調べノートに語句と語釈を書かなければ忘れてしまいます。意味調べノートには、調べた言葉がどんどんたまっていきますが、これを見て子どもたちは自分の学習を振り返ります。

辞書に付箋を貼らせることには、2つの意味があります。その一つは、子どもたちに同じ言葉を複数回調べていることを気づかせるためです。一つの言葉にはふつう何種類かの語釈があり、同じ言葉が別の語釈で使われていることもたびたびあります。子どもたちはこのようなとき、今出てきている言葉の語釈は何かと考えます。もちろん、以前調べた語釈を忘れて、再び調べるということもあります。このようにして、子どもたちが知る言葉が広がります。もう一つは、意味調べノート同様、学習を振り返らせるためです。たくさんの付箋がついた辞書は、よく勉強した証拠であり、子どもたちの財産になります。

子どもたちが知る言葉が増えるのは、国語の授業のときだけではなくありません。保健室から配布された「保健だより」の中にわからない言葉がある、テレビで嵐が歌っている歌詞の中にわからない言葉がある、そん

なときも子どもたちは辞書を使います。言葉は、いろいろなところで覚えるものです。このような習慣をすることで、子どもたちは、学校お家を問わずすべての生活の中の言葉にアンテナを張り、言葉を意識するようになります。

「競争ではありません。」と言っているのは、クラスのいろいろな子どもたちに、自分のペースで辞書を使わせるためです。けれども、調べる語数が多い子は、自然と競争しているようです。やらされてではなく、自分でやろうとするとき、学習が楽しくなるのだと考えています。

2週間に一度、自己申告で調べた言葉の語数を聞きますが、ここにも2つの意味があります。その一つは子どもたちのがんばりを確認し、褒めてやるためです。2週間の期間を空けると調べた語数はかなり増えます。周りの子ががんばっているのが分かるし、あまりにも自分が少なかったら恥ずかしいという空気があり、自然と刺激になっています。語数が増えた子は、増えた数ではなくそのがんばりを思いっきり褒めます。定期的に語数を聞くことで、その子の意欲が継続しているかどうかもわかります。意味調べ一つをとっても、個々の子どもたちへの細かな指導が必要です。もう一つには、2週間に一度の自己申告の記録なら、私自身も指導を続けることができるということです。学校では、各教科の指導や突然の生活指導もあります。子どもたちの進捗と私の時間を考えると、2週間に一度程度が最適です。

言葉の意味に限らず、わからないことをそのままにしておくはいけません。これは他の教科にも通じることで、私が子どもたちに教えたいことです。また、子どもたちは最終的には自分で学習できるようにならないといけません。私が担任でなくなったときも、この学習の姿勢が続くといいと思っています。

3.4.4. 学習結果

付箋が貼られた辞書、意味調べノート、M教諭が記録した児童の学習結果（意味調べ語数）の一部を、それぞれ図8、図9、図10に示す。



図8 付箋が貼られた辞書

護者の言葉「勉強の取り組み方、がんばること、出来た時の喜びや楽しみ方を教えていただいた」は、M教諭の「思い」を感じた結果の言葉と考えられる。同僚教員等は、M教諭がどの教材を使っているか、どのように使っているかは知ることができるが、多くの場合、M教諭の「思い」を知ることにはできない。

この3層構造から、広く使われている教材を「選択」し、よくある「仕組」を用いて児童に秀でた学習意欲を育成したM教諭の学級経営の基幹は、M教諭の「思い」にあると考えられた。M教諭の「思い」とは如何なるものか、続いて本研究では、M教諭の「思い」の分析を行なった。

4.2. 「思い」の分析

M教諭の「思い」の構造を明らかにするため、M教諭の一連の発言から同種の発言を帰納的にまとめるといふ分析を行った。さらに、そのまとまりを「思い」の構成要素として、「児童を正視する要素」「教育の専門知識とスキルの要素」「教員の自己管理の要素」とした。さらにこれらの要素は、複数の意志やスキルにより構成されると考えられた。表1にこれを示す。

表1 「思い」を構成する要素

- | |
|--------------------------|
| ① 児童を正視する要素 |
| 1-1 すべての児童をがんばらせるという決意 |
| 1-2 一人ひとりの児童の学び方の尊重 |
| 1-3 すべての児童に成功体験させようという配慮 |
| ② 教育の専門知識とスキルの要素 |
| 2-1 児童は指導により伸びるという信念 |
| 2-2 学び方が大切だという認識 |
| 2-3 一人ひとりの児童の成長についての展望 |
| 2-4 集団の力を機能させようとする意図 |
| ③ 教員の自己管理の要素 |
| 3-1 自分の指導を継続させる工夫 |

「児童を正視する要素」は、児童一人ひとりに注目しながら、すべての児童に網を張り、指導しようとする要素である。これは、優れた教師力を有する教員に顕著にみられる児童生徒主体の教育観であり、M教諭の発言（文末資料①参照）には、具体的にどのような「思い」であるのかが示されている。調査では語られなかったM教諭の日常の言動にも、この要素が位置づいているのであろう。ただしこの要素は、ある程度の教職経験を重ねたある時期（赤井他 2013）発現する要素であると考えられる。

「教育の専門知識とスキルの要素」は、教育の専門知識があるという状態だけではなく、その知識を児童

の指導に生かすスキルが一体となった要素と考えられる。M教諭は、児童に目標を明確にさせる、あるいは自分の学習を振り返らせることを常に念頭においている。M教諭の発言（文末資料②参照）からは、ある時は厳しく、ある時は褒め、児童を導くM教諭のスキルを垣間見ることができる。

「教員の自己管理の要素」は、自分の勤務と指導のバランスをとる要素である。学校での教育は、人的、時間的、物理的制約の中で行われる。指導を継続するための自己管理は、現実には避けて通れない。（文末資料③参照）これにより、M教諭は限られた時間の中で大きな効果を生む指導が行えたものと考えられる。

これら3つの要素により、学級の児童は一人の例外もなくM教諭の手中にあることになり、さらにこの3要素は、児童の学習意欲育成に大きな役割を果たしたことが推察された。

5. 今後の課題

教師力のある教員から、初任者などの比較的教職経験が少ない教員への教師力の伝達は、教員研修という形で行われている。しかし、ここで研修されるのは、「選択」「仕組」の層である場合が多い。本研究で示した「思い」の層の存在とその重要性は、研修の在り方に新たな課題を提示する。研修を受けた教員に「思い」が希薄な場合、研修が教育効果に結びつかないと考えられるからである。今後、研修における「思い」の層の伝承、あるいは醸成をどのように行うのが課題として残る。

6. 謝辞

本研究にあたり、ご自身の実践をすべて提供いただいたM教諭に、衷心よりお礼申し上げる次第である。

註記

1 教材コーディネーション

教員は、教育のためにさまざまな教材を用いる。ここでは、教員の意図、児童生徒の実態などに応じて教材の使い方が調整される。本研究ではこれを教材コーディネーションとよぶ。

2 外発的な学習意欲、内発的な学習意欲

桜井（1997）は、誰かに「しなさい」と指示されて学習することを外発的な学習意欲、自分で目標を定めその達成に向けて努力することを内発的な学習意欲とよんでいる。

3 「選択」「仕組」の聞き取り

教材コーディネーションの「選択」「仕組」について

ては、平成26年5月9日、同16日、M教諭から口頭で説明を受けた。さらに、関係資料の提供を受けた。

4 「思い」の聞き取り

教材コーディネーションの「思い」については、平成26年8月1日、M教諭から口頭で説明を受け、筆者が文章化した。その内容の是非については、後日M教諭から了解を得た。

5 学習結果

M教諭から提供された学習結果の記録には、氏名欄に児童名の記載があった。そのため、本論文への掲載時に網掛け加工を行った。

6 同僚教員等

同僚教員等とは、同じ学校の校長、教頭、教員、他学級の保護者、教育委員会の指導主事など、M教諭とは一定の関係にあるが、M教諭の指導に直接関わらない者のことである。

引用文献、参考文献

桜井茂男 学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる— 誠信書房 1997 pp.96・115

文部科学省 小学校学習指導要領(平成20年3月告示) 東京書籍 2008 p.13

藤岡信勝 授業づくりの発想 日本書籍 1989 pp.66・69

佐久間勝彦 授業研究用語辞典(横須賀薫編) 教材の選択 教育出版 1990 p.72

赤井悟、生田周二、赤沢早人、柴本枝美 教師力の形成と成長についての調査研究—平成23年度奈良県優秀教職員へのヒアリングから— 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要第22号 奈良教育大学教育実践開発研究センター 2013 pp.199-204

秋田喜代美 学びの心理学—授業をデザインする— 放送大学叢書 左右社 2012 p.226

資料(M教諭の発言の分析)

① 「児童を正視する要素」

[1-1] すべての児童をがんばらせるという決意

- ・定期的に練習ページを聞くことで、その子の意欲が継続しているか、またはどこかで挫折しているかがわかります。(計算練習より)
- ・定期的に語数を聞くことで、その子の意欲が継続しているかどうかもわかります。(意味調べより)
- ・学習が遅れがちな子どもでも、漢字は練習すれば必ず覚えられます。(漢字記憶より)
- ・テストを返すときには、子どもたちががんばりを振り返れるよう、短くコメントします。(漢字記憶より)
- ・語数が増えた子は、増えた数ではなくそのがんばりを思いっきり褒めます。(意味調べより)

[1-2] 一人ひとりの児童の学び方の尊重

- ・「競争ではありません。」と言っているのは、クラスの子どもたち全員がいわゆる良くできる子ではないし、興味あるところも、使える時間も、家庭の環境もみなそれぞれ違うからです。(計算練習より)
- ・「競争ではありません。」と言っているのは、クラスのいろいろな子どもたちに、自分のペースで辞書を使わせるためです。(意味調べより)
- ・上位の子どもは競争で伸びますが、一番でないから計算ドリルはもうしないという子どもを出してはいけません。子どもたちそれぞれのペースでがんばればよいのです。(計算練習より)
- ・調べる語数が多い子は、自然と競争しているようです。(意味調べより)

[1-3] すべての児童に成功体験させようという配慮

- ・漢字ドリルと漢字テストは、がんばればできるということを子どもたちに体験させるための教材です。(漢字記憶より)
- ・(50問まとめ) テストで満点だったということは、子どもたちにとってはこの上ない自信になります。(漢字記憶より)
- ・やはり、100点は特別です。このようなことがきっかけで、子どもたちは他の学習にも自信をもち、表情も変わってきます。(漢字記憶より)
- ・意味調べノートには、調べた言葉がどどんたまっていきますが、これを見て子どもたちは自分の学習を振り返ります。(意味調べより)
- ・(辞書に付箋を貼らせるのは) 学習を振り返らせるためです。たくさんの付箋がついた辞書は、よく勉強した証拠であり、子どもたちの財産になります。(意味調べより)
- ・(2週間に一度、何ページしたかを聞くのは) 子どもたちのがんばりを確認し、褒めてやるためです。(計算練習より)
- ・(2週間に一度、調べた語数を聞くのは) 子どもたちのがんばりを確認し、褒めてやるためです。2週間の期間を空けると調べた語数はかなり増えます。(意味調べより)

② 「教育の専門知識とスキルの要素」

[2-1] 児童は指導により伸びるという信念

- ・先生は、子どもを褒め励ますプロでないとはいけません。(計算練習より)
- ・指導のないところに教育はありません。(漢字記憶より)
- ・漢字指導は、あらゆる指導の基本です。「とめる」「はねる」「はらう」を正確に書くことや書き順、書き方(部首や覚え方)を丁寧に指導します。(漢字記憶より)
- ・意味調べ一つをとっても、個々の子どもたちへの細

かな指導が必要です。(意味調べより)

- ・子どもたちが嘘の申告をすると、経験上なぜか私の目に留まります。(計算練習より)
- ・(漢字の宿題では)丁寧に書くことを指導しています。これは、テレビを見ながらなどはいけないということで、丁寧に書いていないノートはやり直させます。(漢字記憶より)

[2-2] 学び方が大切だという認識

- ・できなかったことをできるようにする、分からなかったことを分かるようにする、私はそれが学習だと考えています。(漢字記憶より)
- ・言葉の意味に限らず、わからないことをそのままにしてはいけません。これは他の教科にも通じることで、私が子どもたちに教えたことです。(意味調べより)
- ・丁寧に書かせることで、子ども自身もノートが見やすくなり、ケアレスミスを防ぐことができます。(計算練習より)
- ・ノートに書いただけでは練習したことになりません。満点が取れるようになって初めて練習したと言えます。(漢字記憶より)
- ・(辞書に付箋を貼らせるのは)子どもたちに同じ言葉を複数回調べていることを気づかせるためです。(意味調べより)
- ・(同じ言葉が別の語釈で使われているとき、子どもたちは)今出てきている言葉の語釈は何かと考えます。(意味調べより)
- ・子どもたちが知る言葉が増えるのは、国語の授業のときだけではありません。(中略)言葉は、いろいろなところで覚えるものです。このような習慣を作ることで、子どもたちは、(中略)すべての生活の中の言葉にアンテナを張り、言葉を意識するようになります。(意味調べより)
- ・調べるのは楽しいですが、それだけではだめで、意味調べノートに語句と語釈を書かなければ忘れてしまいます。(意味調べより)
- ・「同じページは1日に1回」としているのは、同じページを続けて練習しても意味がないからです。答えを覚えてしまって、それを書いているという状態になるので。(計算練習より)
- ・漢字ドリルは計算ドリルのように何度もさせていません。一度覚えた漢字は何度も書く必要はないからです。(漢字記憶より)
- ・間違った漢字があった子どもには、再度の練習と再テストを行い、確実に記憶させるようにします。(漢字記憶より)

[2-3] 一人ひとりの児童の成長についての展望

- ・計算は、何度も練習することでその速さが速くなり、ミスが減ります。計算に余裕ができた分、次の考えるということにも余裕ができます。(計算練習より)

- ・テストという具体的な目標があるから、子どもたちは勉強します。(漢字記憶より)
- ・小学校3年生の段階では、予習はいりません。私は、子どもたちが学校で初めて単元の内容に出会い、それを考えるという授業をしたいと考えています。ここで子どもたちには、解き方を考える楽しさを体験させます。(計算練習より)
- ・勉強は厳しく辛いものですが、一方では楽しく、それに目標がなければ続きません。(漢字記憶より)
- ・子どもたちは最終的には自分で学習できるようにならないといけません。私が担任でなくなったときも、この学習の姿勢が続くといいと思っています。(意味調べより)
- ・やらされてではなく、自分でやろうとするとき、学習が楽しくなるのだと考えています。(意味調べより)

[2-4] 集団の力を機能させようとする意図

- ・学級という集団には、子どもを伸ばす働きがあります。(漢字記憶より)
- ・子どもたちには、「みんなでがんばろうね。」と言っています。(漢字記憶より)
- ・計算ドリルでは、必ず学級にきちっとする子がおり、私が「同じページを3回するとすらすらできるようになるよね。」と問いかけると、うなずいてくれます。それを周りの子どもたちは見ているのです。この子どもたちが学級を引っ張ってくれるのです。(計算練習より)
- ・もう少して全員満点のときは、「あと3人で全員満点でした。」などと言っています。(漢字記憶より)
- ・今まで学習が遅れがちだった子が50問テストで満点を取ったとき、全員の前で発表したことがありました。みんなは「おっ〜。」と言って拍手しました。私は、さらにその子のがんばりを追認しました。(漢字記憶より)
- ・周りの子ががんばっているのが分かるし、あまりにも自分が少なかったら恥ずかしいという空気があり、自然と刺激になっています。(意味調べより)

[3] 「教員の自己管理の要素」

[3-1] 自分の指導を継続させる工夫

- ・一人ひとりの計算ドリルノートのチェックはたいへん時間がかかります。2週間に一度自己申告を聞くことにすれば、それほど負担なく私の学校の仕事に位置づけることができます。(計算練習より)
- ・2週間に一度の自己申告の記録なら、私自身も指導を続けることができるということです。学校では、各教科の指導や突然の生活指導もあります。子どもたちの進捗と私の時間を考えると、2週間に一度程度が最適です。(意味調べより)

